

## イエス・キリストの まこと

パウロ書簡の神人学的理解の試み<sup>(1)</sup>

小川 修\*

## 抄録

本稿はパウロ書簡の神人学的理解の試みであるが、具体的には「〈まこと〉から〈まこと〉へ」(ἐκ πίστεως εἰς πίστιν)の意味を、主としてローマ書5章から解明しようとしている。それは今日の神学界の通説とは大きく異なった解釈かもしれないが、マルティン・ルターから多大の触発を受けている。

**Key words :** 〈まこと〉から〈まこと〉へ、〈こころ〉言語、〈からだ〉言語

## 序 — 『キリスト者の自由』から

ルターは『キリスト者の自由』十二章に次のように述べる。以下はその全文である。

「第十二、信仰 (Glaube) は、魂 (Seele) が神のことばと等しくなり、すべての恩恵で充たされ、自由で救われるようにするばかりでなく、新婦が新郎とひとつにされるように、魂をキリストとひとつにする。この結合 (Ehe) から、聖パウロも言っているとおりに [エフェソ5章30]、キリストと魂とはひとつのからだ (ein Leib) となり、両者の所有、すなわち、幸も不幸もあらゆるものが共有となり、キリストが所有なさるものは信仰ある (glaubig) 魂のものとなり、魂が所有するものはキリストのものとなる、という結果が生じる。ところでキリストは一切の宝と祝福とを持っておられるが、こ

れらは魂のものとなり、魂は一切の不徳と罪とを負っているが、これらはキリストのものとなる。ここに今や喜ばしい交換 (Wechsel) と取り合い (Streit) とが始まる。キリストは神であって人であり、まだ一度も罪を犯したことがなく、その義は打ち破られることなく、永遠で全能であるので、信仰をもつ (glaubig) 魂の罪を、その結婚指環 (Brautring)、すなわち信仰によってご自身のものとされ、あたかもご自分がその罪を犯したかのようになさるのである。すると罪はキリストの中に呑み込まれ、溺れさせられてしまう (verschlungen und ersauft werden)。なぜなら、キリストの打ち破られることのない義はすべての罪に対してあまりにも強いからである。こうして魂は、ただその結納品 (Malschatz)、すなわち信仰のゆえに、自分のすべての罪から免れ、自由となり、新郎キリストの永遠の義を与えられる。富んだ、高貴で義である新郎キリストが、貧しく、いやしく、悪い娼婦をめぐって、すべての悪から解放し、すべての財貨をもって飾ってくださるとしたら、それは喜ばしい結婚

\* Ogawa, Osamu  
聖徳大学人文学部教授

ではないか。こうして、罪が魂を永遠の罰に定めることは不可能になる。なぜなら罪はいまやキリストの上に置かれ、キリストの中に呑み込まれてしまっているからである。こうして魂はその新郎において豊かな義をもっているのですべての罪が自分の上に負わされることがあっても、すべての罪に対抗してまたもや耐え抜くことができる。これについてパウロはコリントの信徒への手紙Ⅰ第15章[57節]に、「私たちの主イエス・キリストによって私たちに勝利を賜る神に、感謝し」と言っている。(傍点筆者)(徳善義和訳『ルター著作選集』所収 p.276f. 教文館)

この印象的な十二章で、ルターは、それまで述べてきた Glaube 概念(これを以下本稿では「信仰」という誤解されやすい日本語にはせず、あえて原語のままにしておく。もともとルターは、パウロの決して単純ではない πίστις の語法をそのまま単純に Glaube というドイツ語に置き換えたい)を一歩進めて、「魂をキリストとひとつにする」(die Seele mit Christo vereinigen)ものとし、「結婚」(徳善訳では「結合」)、「ひとつのからだ」、「結婚指環」、「結納品」などと言ひ換える。われわれはこれに「人基一体」という用語をあてることにしたい。<sup>21)</sup>つまり、Glaube とは人基一体をもたらすもの、また人基一体そのもののことである。そしてここに、ルターがきわめて印象的且つ具体的に展開している人基一体の内容をもう一度要約してみると、それはこの語から容易に予想されるような神秘主義的な unio mystica などでは決してなく、きわめてパウロ的なもの、すなわち、人間が罪から解放され義とされること、(神学的な術語を使えば)「義認」であり「義化」であり、人間の罪とキリストの義の「交換」(Wechsel)、すなわち「和解」(καταλλαγή)であるとされる。繰り返せば、Glaube とは、人基一体のことであり、人基一体とは義認や和解を意味するというわけである。そして、後に論ずることになるが、この Glaube、この人基一体とは、パウロにあっては第一義的には、人間のいわゆる「信仰」とか「決断」といわれるもの

に先立つ、人間の主観性を超えた、ある「根源的な事実」をいうのであるが、実にルターのこの短い一章は、このパウロ的な「根源の〈こと〉」を、これ以上望めないほどの確に言い当てているといわなければならない。なぜなら、このような根源的な〈こと〉を述べているルターの Glaube 概念こそは、ガラテヤ書2章20節後半にある πίστις τοῦ υἱοῦ τοῦ θεοῦ (神の子の〈まこと〉)に直結し、さらに義認論の主要な論拠の一つ同2章16節の πίστις (Ἰησοῦ) Χριστοῦ (イエス・キリストの〈まこと〉)に通じるのみならず、『ローマの信徒への手紙序文』の中に見られる(今日のわれわれには多分に stereotype になってしまった感のある)ルターの有名な「信仰」の定義を超えて、パウロのローマ書原典にある πίστις 概念にもっともよく肉迫していると筆者には思えるからである。

#### 註

もともとルター神学に疎い筆者がパウロ神学を解明するためのカテゴリーとして使い出した「人基一体」なる概念をルターにも適用するについては、一抹の不安がないわけではない。それはルターがいつている「魂」(Seele)の意味である。ここでは広い意味にそれを取って「人」と解したが、果たしてそれでよいかどうか、筆者には判断できない。ルターはここで明らかに「魂をキリストとひとつにする」(die Seele mit Christo vereinigen)といっているのであるが、実はこれはパウロがいいそうもないせりふである。パウロが人間とキリストの一体性について語るとき、それは人間の〈こころ〉とキリストの関係ではなく、人間の〈からだ〉とキリストの関係をいつているのである。その顕著な例が第一コリント書6章後半に見られる。彼はここでコリントの霊的熱狂家(〈こころ〉人間 cf.2C12:2f. 一後述)たちを念頭においてか、その性的放縦主義を糾弾して、人間の〈からだ〉はキリストの肢体であること(v.15)、〈からだ〉は、性的不品行のためではなく、主のものであり、主は〈からだ〉のものである(人基相即)こと(v.13)、そして〈からだ〉は聖霊の宮であること(v.19)を述べ、遊女を買う者は自分がキリストの肢体であることを否定することになる(v.15)という。近代人はキリストを〈こころ〉の中にあるものと考え、それを〈こころ〉の中に虚しく探し回るのが常であるが、パウロでは明らかにそうではない。σῶμα、もしくはσῶμαと同義のσάρξが、キリストの居ましたもう場なのである(後述)。

ただし、上に引いた徳善訳にも注記されてあるように、

ルターは魂とキリストの一体性を述べる時、エフェソ書5章30節（「わたしたちはキリストの〈からだ〉の肢体であり、その肉と骨からできた肢体である」—ルター訳）を考えていたらしいことは、『ガラテヤ書大講解』2章20節の釈義の中でも明らかなので、それに勇気づけられてパウロにルターを重ねたのである。ここでルターが述べている人基一体はルター神学の内部ではどのような位置づけと意味をもつのか、それはルターの専門家に教えていただくほかないが、このルターの言葉自体はパウロ神人学の解明に大いに役立つと筆者には思われるので、ここに引用させていただいた次第である。本稿にとっては、聖書のザッへの解明こそが問題なのであって、その視点からいうと、このルターの言葉は最大級の賛辞に値する。これ以上見事にパウロ神人学の核心を言い当てたものがほかにあろうか。しかし、この言葉が、ルター神学全体の中で、あるいはもっと広く、西洋神学史において、どのように位置づけられるのか、いかなる意味を持つのか等々は、神学者の課題ではあっても、本稿の課題ではない。

ともあれ、『キリスト者の自由』の本章は、直接にはガラテヤ書2章20節後半の、これ以上ない見事な explicatio であると考えられる。そのガラテヤ書から見て行くことにしよう。

## 1 ἐκ πίστεως εἰς πίστιν ーガラテヤ書2章から

2:19 ἐγὼ γὰρ διὰ νόμου νόμῳ ἀπέθανον, ἵνα θεῶ ζῆσω. Χριστῷ συνεσταύρωμαι·

2:20a ζῶ δὲ οὐκέτι ἐγώ, ζῆ δὲ ἐν ἐμοὶ Χριστός·

2:20b ὁ δὲ νῦν ζῶ ἐν σαρκί, ἐν πίστει ζῶ τῇ τοῦ υἱοῦ τοῦ θεοῦ τοῦ ἀγαπήσαντός με καὶ παραδόντος ἑαυτὸν ὑπὲρ ἐμοῦ.

2:19 なぜなら、わたしは、神に生きるために、ノモス（＝キリストのノモス G6:2, 〈まこと〉のノモス R3:27）によって律法（＝モーセ律法）に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。

2:20a 生きているのは、もはや、わたしではない。わたしのうちに生きているのはキリストである。

2:20b なぜなら（denn—ルターの訳による）、わ

たしが今肉体にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身を棄てた神の子の〈まこと〉の中に生きているからである。

あらかじめ申し上げておくが、ここで πίστις τοῦ υἱοῦ τοῦ θεοῦ は、「神の子の〈まこと〉」とし、通常の聖書翻訳のように「神の子に対する信仰」（Glaube an den Sohn Gottes）（faith in the Son of God）とはしていない。<sup>(2)</sup> 本稿はこの属格を目的語的属格ではなく、主語的属格あるいは同格的属格として解釈している。（これは今日の神学界では絶対少数派である）。その理由は本稿全体が説明するであろう。（蛇足ながら、本稿はそれを証明するつもりはない。それこそはパウロ神人学の前提であり公理であって、われわれもいつかはそれに頷くほかない、その上で、そこから考え解釈していくほかないものと考えからである）。πίστιςを「わたしを愛し、わたしのためにご自身を棄てた神の子に対する信仰」とは解さない以上、πίστιςとは、キリストの十字架への「信仰」、十字架「信仰」のことというより、キリストが「わたしを愛し、わたしのためにご自身を棄てた」、まさにその〈こと〉、キリストの十字架そのものの〈こと〉をいう。したがって本論文ではこの場合の πίστις を〈まこと〉と訳し表記することにする。それは「真言」、すなわち、本当の〈こと〉、根源の〈こと〉をいうからであるが、同時にそれは声を発してくる〈こと〉として「真言」をも意味しうるからである。ローマ書に「福音において神の義は（神の）〈まこと〉から（人間の）〈まこと〉へ（ἐκ πίστεως εἰς πίστιν）と啓示される（ἀποκαλύπτεται）」（1:17a）とあり、また「神の義はイエス・キリストの〈まこと〉により（それを）信ずる人すべてに（διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ εἰς πάντας τοὺς πιστεύοντας）（示されている）（πεφανέρωται）」（3:22a）とある通りである。根源の〈こと〉が語る。それが、神の言葉であり、真言である。

ともあれ、ガラテヤ書の当該箇所（2:20b）の意味は、「わたしが今肉体にあって生きている」、

すなわち、わたしがいま・ここに生きている、わたしの現実の生、あるいはもっとリアルにいうと、わたしの<sup>1</sup>身体的生は、たとえそれが罪と死の刻印を受け、絶望のどん底に喘ぐもの（「貧しく、いやしく、悪い娼婦！」）であっても、「わたしを愛し、わたしのためにご自身を棄てた神の子の〈まこと〉の中に」抱かれているというのである。そして、このように、人基一体の〈まこと〉、義認と和解という根源の〈こと〉の中に、人間の現実はずっとに置かれている（v.20b）が故に、まさにこの〈まこと〉の法則によって（διὰ νόμου）、わたしは罪と宗教（律法）に対して死に（νόμῳ ἀπέθανον）、キリストがわたしの生（したがってまた、わたしの認識）の主体になる（Christus in me）というのである（v.19～20a）。わたしが、わたしとして単独にあるのではなく、実はキリストの中にある（ego in Christo）（v.20b）ということは、キリストがわたしの中にある（Christus in me）（v.19～20a）ということになる。人基一体は人基相入である。キリストとは、この人基一体という〈まこと〉の名である。パウロはそれをπίστις Ἰησοῦ Χριστοῦと<sup>2</sup>いった。ここでは人間は、ルターが先の十二章で描いてみせたように、既に罪と宗教（律法）から解放され、義とされている（R3：28b：δικαιοῦσθαι πίστει ἄνθρωπου）。ここでは人間は、〈まこと〉によって生かされている〈まこと〉人間（義人）である（R1：17b）。そしてそれこそが、神による人間の根本的な決定だ（IC1：30）といわなければならないが、いまやそれが人間において気づかれ自覚されてくる（R3：28a：λογιζόμεθα）。それがChristus in me（2：20a）であり、それが認識であり信仰である（2：16）というのである。この展開をἐκ πίστεως εἰς πίστιν（〈まこと〉から信仰へ）という。

2：16 εἰδότες [δὲ] ὅτι οὐ δικαιοῦται ἄνθρωπος ἐξ ἔργων νόμου ἂν μὴ διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ, καὶ ἡμεῖς εἰς Χριστὸν Ἰησοῦν ἐπιστεῦσαμεν, ἵνα δικαιοθῶμεν ἐκ πίστεως Χριστοῦ καὶ οὐκ ἐξ ἔργων νόμου...

2：16 人間が義とされるのは律法の業によるのではなく、ただイエス・キリストの〈まこと〉によることを知って、わたしたちが律法の業によるのではなく、キリストの〈まこと〉によって義とされているように、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。…

このイエス・キリストの〈まこと〉・この人基一体・この神の決定において、罪は消失し、人間は義であり、救われているということに、人間が気づき、それを認識するとき、彼はこの神の根源的な決定を自己の決定として生きるであろう。それがパウロのキリスト信仰である。この、人基一体という根源的事実とその認識、（パウロの言葉でいえば）ἐκ πίστεως εἰς πίστινというパウロ神学の構造と運動を、われわれは今度はローマ書5章とコリント前後書により、詳細に見て行くことにしよう。

## 2 ἐκ πίστεως εἰς πίστιν —ローマ書5章前半から

以下ローマ書5章の解釈を試みる。論理的な順序からいうと5章後半（ἐκ πίστεως）（v.12～21）から前半（εἰς πίστιν）（v.1～11）へと述べた方がすっきりするかもしれないが、ここでは一応聖書の順にしたがって論述しよう。

5章前半はさらに二つの段落（v.1～5およびv.6～11）に分けられるが、双方とも、ἐκ πίστεως εἰς πίστιν、すなわち、「キリストの〈まこと〉から人間の信仰へ」を論じていると考えられる。われわれは便宜上、前のἐκ πίστεωςのπίστις（キリストの〈まこと〉）を「第一のピステイス」、後のεἰς πίστινのπίστις（人間の〈まこと〉・信仰・自覚・認識）を「第二のピステイス」と名づけることにしよう。そうすると5章前半は「第一のピステイスから第二のピステイスへ」ということを論じているわけであるが、重心は、5章後半とは逆に、第二のピステイスにある。

5:1 Δικαιωθέντες οὖν ἐκ πίστεως εἰρήνην ἔχομεν πρὸς τὸν θεὸν διὰ τοῦ κυρίου ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ

5:2 δι' οὗ καὶ τὴν προσαγωγὴν ἐσχήκαμεν τῇ πίστει εἰς τὴν χάριν ταύτην ἐν ἣ ἑστήκαμεν καὶ καυχώμεθα ἐπ' ἐλπίδι τῆς δόξης τοῦ θεοῦ.

5:3a οὐ μόνον δε', ἀλλὰ καὶ καυχώμεθα ἐν ταῖς θλίψεσιν,

5:3b [εἰδότες ὅτι ἡ θλίψις ὑπομοιρῆν κατεργάζεται,

5:4 ἡ δὲ ὑπομοιρῆ δοκιμὴν, ἡ δὲ δοκιμὴ ἐλπίδα.

5:5a ἡ δὲ ἐλπίς οὐ κατασχύνει,]

5:5b ὅτι ἡ ἀγάπη τοῦ θεοῦ ἐκκέχυται ἐν ταῖς καρδίαις ἡμῶν διὰ πνεύματος ἀγίου τοῦ δοθέντος ἡμῖν.

5:1 このように、わたしたちは、〈まこと〉によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。

5:2 わたしたちは、彼により、いま立っているこの恵みに〈まこと〉によって導き入れられ、そして、神の栄光への希望を誇っている。

5:3a それだけではなく、患難をも誇っている。

[ (5:3b) わたしたちは、患難は忍耐をもたらし、(5:4) 忍耐は錬達をもたらし、錬達は希望をもたらし、(5:5a) しかもこの希望は裏切らないということを知っている。]

5:5b なぜなら、わたしたちに聖霊が賜われることによって、わたしたちの〈こころ〉に神の愛が注がれているからである。

1節と2節前半に出てくるπίστιςは、われわれが既に論じてきた第一のピステイス、すなわち、πίστις Ἰησοῦ Χριστοῦ (イエス・キリストの〈まこと〉) である。この〈まこと〉により、(あるいは同じことだが)、「わたしたちの主イエス・キリストにより」、わたしたちは義とされ、神と和解し、「いま立っているこの恵み」を得たというのである。われわれの用語でいう人基一体である。ルターがいったように、神の〈まこと〉(この〈まこと〉の名をイエス・キリストというのだが)により、人間はキリストと一つである。これが1節と2節前半の意

味である。2節後半 (καὶ καυχώμεθα ἐπ' ἐλπίδι τῆς δόξης τοῦ θεοῦ) の「神の栄光への希望」<sup>9)</sup> もこの人基一体をさすと考えてよいから、2節後半はとくに人基一体の自覚をいっていると解してよい。第二のピステイスである。「誇る」とは、強く意識することだからである。要するに、1節2節でいう「義とされる」「神との平和」「いま立っているこの恵み」「神の栄光への希望」はみな同じことをいっており、いまやわたしたちはそれを、すなわち、人基一体を「誇る」、はっきりと意識し自覚している、というのである。第一のピステイスから第二のピステイスへ、ἐκ πίστεως εἰς πίστιν である。

3節から5節までは、ブルトマンの註解 (Exegetica S.425) にしたがって3b~5a節を挿入句と見、カッコに入れた。そうすると、5b節は「わたしたちの〈こころ〉には神の愛 (=キリスト v.8) が注がれている」、すなわち、Christus in nobis、第二のピステイス、人基一体の自覚を意味することになって、3a節は、この人基一体の自覚による「十字架即復活」「審判即恩寵」の認識を語っていることになる、つまり、第二のピステイス、人間の信仰を二つの καυχώμεθα (誇る) に展開して見せたのであるが、結語で論ずることになるので、ここでは先を急ごう。

5:6 Ἐτι γὰρ Χριστὸς ὄντων ἡμῶν ἀσθενῶν ἔτι κατὰ καιρὸν ὑπὲρ ἀσεβῶν ἀπέθανεν.

5:7 μόλις γὰρ ὑπὲρ δικαίου τις ἀποθανεῖται· ὑπὲρ γὰρ τοῦ ἀγαθοῦ τάχα τις καὶ τολμᾷ ἀποθανεῖν·

5:8 συνίστησιν δὲ τὴν ἑαυτοῦ ἀγάπην εἰς ἡμᾶς ὁ θεός, ὅτι ἔτι ἀμαρτωλῶν ὄντων ἡμῶν Χριστὸς ὑπὲρ ἡμῶν ἀπέθανεν.

5:9 πολλῶ οὖν μᾶλλον δικαιωθέντες νῦν ἐν τῷ αἵματι αὐτοῦ σωθησόμεθα δι' αὐτοῦ ἀπὸ τῆς ὀργῆς.

5:10 εἰ γὰρ ἐχθροὶ ὄντες κατηλλάγημεν τῷ θεῷ διὰ τοῦ θανάτου τοῦ υἱοῦ αὐτοῦ, πολλῶ μᾶλλον καταλλαγέντες σωθησόμεθα ἐν τῇ ζωῇ αὐτοῦ·

5:11 οὐ μόνον δε, ἀλλὰ καὶ καυχώμενοι ἐν τῷ θεῷ διὰ τοῦ κυρίου ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ δι' οὗ

νῦν τὴν καταλλαγὴν ἐλάβομεν.

5:6 それというのも、わたしたちがまだ弱かったころ、まだ時間に従っていて神を持たない者たち (わたしたち) のために、キリストは、(時間先立って) 死んだからである。

5:7 正しい人のために (であっても)、死ぬ人は、ほとんどいないであろう。でもひょっとして善人のためには、あるいは進んで死ぬ者もいるかも知れないが。

5:8 しかし、神がわたしたちに対する自らの愛を示されたのは、まだ罪人であったわたしたちのために、キリストが死ぬということによってであった。

5:9 (それ故)、わたしたちは、今はキリストの血によって義とされているのだから、なおさら、彼によって神の怒りから救われるであろう。

5:10 言い換えれば、わたしたちが敵であったとき (できえ)、御子の死によって神と和解させられていたとすれば、和解を受けさせられているわたしたちは、なおさら、彼の生命に中であって救われるであろう。

5:11 しかしそれだけではなく、わたしたちは、今や和解を得させて下さったわたしたちの主イエス・キリストによって、神を誇るのである。

ここでも ἐκ πίστεως εἰς πίστιν が述べられている。つまり、「キリストがわたしたちのために死んだ」(v.6, v.8)、「わたしたちは、今はキリストの血によって義とされた」(v.9)、「わたしたちは御子の死によって神と和解させられた」(v.10) というのは、明らかに第一のピステイスのパラフレーズである。他方、第二のピステイスは二つの未来形の動詞 σωθησόμεθα (「救われるであろう」—永遠なる過去から見れば、時間は未来である) と言い換えられ、さらには11節では「神を誇る」という形で統括されている。そして、9節と10節の二つの πολλῶ μᾶλλον (なおさら) が示しているように、ἐκ πίστεως εἰς πίστιν, 第一のピステイスから第二のピステイスへ、神から人間へ、永遠から時間へ、と救いの出来事は展開している。

しかし、この段落はとくに、本論文の主題でもある第一のピステイス、すなわち、πίστις Ἰησοῦ Χριστοῦ (イエス・キリストの〈まこと〉) について、それが、第二のピステイス、すなわち、人間の〈まこと〉・人間の信仰との関係だけでなく、それと人間の不実 (ἀπιστία ἀνθρώπων) ・人間の不信仰との関係についても、きわめて重要な意味射程を持っていることを表明している。もちろんここでも第一のピステイスは、罪人であるわたしたちのためにキリストが死に (十字架・贖罪)、それによって神が人間と和解する〈こと〉とされているが、それだけでなく、この〈まこと〉の出来事が、第二のピステイスに先立つ、人間の信仰以前 (不信仰時) の、否むしろ、人間の信仰不信仰という主観性によらない、その意味で客観的な、(否むしろ) 人間の「主観-客観」という認識構造 (「肉によって知る!」2C5:16) を超えた (その意味で) 超主観的な、それ故にまた非時間的な出来事 (唯一回性の出来事 R6:10) とされていることである。われわれはこれに充分注意を払わなければならない。わたしたちがまだ弱く、時間の中に生きており、罪人であり、神の敵であったとき既に、わたしたちは義とされ、和解させられ、キリストに抱かれていた。わたしたちがまだアダムの中にあり (〈ころ〉人間 (1C2:14; 1C15:44) であったとき既に、人間に対する神の〈まこと〉は生起し、わたしたちはキリストの中にあつた。神の実 (πίστις Θεοῦ) は、人間の不実 (ἀπιστία ἀνθρώπων) にもかかわらず、それに排拒されることなく (R3:3f), 成就していた。すなわち、われわれの時間は、われわれの認識以前に、神の永遠に包まれ支えられていた、というのである。

この、人間の不実と神の実、あるいは「人間はアダムの中にある」というリアリティと「人間はキリストの中にある」というリアリティ、アダムと「現実」とキリストの現実、という二つの関係を、パウロは次の5章12節以下に詳細に展開する。次にそれを検討することにしよう。

### 3 ἐκ πίστεως 一ローマ書5章後半から

以下、パウロの主張を明確に理解するために、ネストレ本文の順序を入れ替えて配列してある。(ただし句読点等本文そのものはいっさい変えてない)。その配列変更とは、12節は破格構文であるが、表現上も内容上も18節～21節が接続する(King James 参照)から、18節以下を12節に直接させるが、ただ律法について述べている20節のみ意味内容からみて13節～14節に後続させるのである。そうすると下のように三つの段落が成立することになる。以下個々の段落について考察する。

#### 1) アダムの「現実」(〈ところ〉言語空間)とキリストの現実(〈からだ〉言語空間)は一見したところ並立する二つの人間のリアリティである

5:12 Διὰ τοῦτο ὥσπερ δι' ἐνὸς ἀνθρώπου ἡ ἁμαρτία εἰς τὸν κόσμον εἰσῆλθεν καὶ διὰ τῆς ἁμαρτίας ὁ θάνατος, καὶ οὕτως εἰς πάντας ἀνθρώπους ὁ θάνατος διήλθεν, ἐφ' ᾧ πάντες ἥμαρτον

5:18 Ἄρα οὖν ὡς δι' ἐνὸς παραπτώματος εἰς πάντας ἀνθρώπους εἰς κατάκριμα, οὕτως καὶ δι' ἐνὸς δικαιώματος εἰς πάντας ἀνθρώπους εἰς δικαίωσιν ζωῆς

5:19 ὥσπερ γὰρ διὰ τῆς παρακοῆς τοῦ ἐνὸς ἀνθρώπου ἁμαρτωλοὶ κατεστάθησαν οἱ πολλοί, οὕτως καὶ διὰ τῆς ὑπακοῆς τοῦ ἐνὸς δίκαιου κατασταθήσονται οἱ πολλοί.

5:21 ἵνα ὥσπερ ἐβασίλευσεν ἡ ἁμαρτία ἐν τῷ θανάτῳ, οὕτως καὶ ἡ χάρις βασιλεύσῃ διὰ δικαιοσύνης εἰς ζωὴν αἰώνιον διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ τοῦ κυρίου ἡμῶν.

5:12 (以上述べてきたことは) 次のことによる。ひとりの人によって、罪がこの世に入り、また罪によって死が入ってきたように、このように(= 言い換えれば)、すべての人が(アダム= 〈ところ〉において) 罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだように…。

5:18 このように、ひとりの罪過によって死

(κατάκριμα) がすべての人に(及んだ)ように、ひとりの義なる行為によって、生命の義もすべての人に(及んだ)のである。

5:19 言い換えると、ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされたように、ひとりの従順によって、多くの人が義人とされるであろう。

5:21 なぜなら、罪が死によって支配したように、恵みもまた、わたしたちの主イエス・キリストにより、永遠の生命を得させるべく、義によって支配しているからである。

まず多くの解釈者を困惑させる12節冒頭の Διὰ τοῦτο であるが、この句の後にコロンを想定して上のように訳した。そうすることで12節以下全体が11節までの主張の理由づけの性格を帯びるからである。<sup>(4)</sup>

さて、18節19節21節に特徴的なのは、なんといても ὡς～οὕτως (as～so) あるいは ὥσπερ～οὕτως (as～so) という表現形式である。これによってパウロは、普通よくいわれるように、アダムのリアリティとキリストのリアリティの二つを対比させたのである。しかし12節には ὥσπερ のみ現れて οὕτως は現れていない。いや οὕτως という語は文中にないわけではないが、これはその前の文の内容をもう一度受け直しただけで、ὥσπερ に対応・対比するそれではない。その意味で12節は不完全文である。とはいえ、12節は、アダムの「現実」、すなわち、罪と死の「現実」を、神話的形式ながらよく言い当てているといわねばならない。われわれ現代人の感覚からいえば、罪とは人間に罪を犯させるサタンというより、あくまでも人間の主体的な行為(罪責)であろう。パウロではアダムとは〈ところ〉を意味するが(1C15:45)、ἐφ' ᾧ πάντες ἥμαρτον (すべての人が罪を犯したので)という言い方で、パウロもそのように考えていたように読める。人間をして人間たらしめる最たるもの、それは〈ところ〉であるが、その〈ところ〉が自分を主体として立てることによって(われわれの用語でいうと、人基一体から離れるという不可能事を企てることによって)、罪と死がすべての

人間を支配するに至ったというのである。罪がサタンになったとでもいおうか。<sup>65</sup> 「言語機構分析」<sup>66</sup>によれば、現代の文化文明の中で、哲学や宗教や人文科学や社会科学や文学・芸術はもちろんのこと、もっとも「客観的」とされる精密自然科学（とくにその代表ともいえる物理学）であっても、人間の「主観-客観」という認識構造に基づく〈こころ〉言語の一つにすぎないという。その意味では現代は、罪はパウロの時代のように宗教（律法や神話）という形態を取る（R7:13）だけでなく、〈こころ〉言語という広く且つ徹底した形態を取って、現代人をますます強固にその支配下に置き、人間はますます深く神の見えない死の暗闇の中に置かれていくといえるかもしれぬ。「言語機構分析」によれば、宗教や科学といった〈こころ〉言語は、もともとは人間の〈こころ〉が発明発見したものにすぎないが、今日ではそれが人間から独立し、人間を外から、いわば外力として支配している（Fremdherrschaft）状況である。まさに12節が表現している通りである。人間は、とくに現代の人間は、神の見えない自閉的な、罪と死の「〈こころ〉言語空間」の中に生きている。キリスト教として、それが〈こころ〉言語宗教に墮している限り、同じである。〈こころ〉言語の支配するこのような空間と、その中にどっぷり浸かっているわれわれ——たしかにそれも、否定できないわれわれ人間の「現実」、アダムの「現実」ではある。

この「現実」に対して、パウロは18節19節21節の三節で οὐτως という語をもって始まる文により、もう一つの現実を対置せしめる。言語表現の煩雑なこれら三つの οὐτως 文をすっきり理解するには、これらの文中にある διὰ で始まる四つの前置詞句をその意味内容から見てすべて、διὰ τοῦ θανάτου τοῦ υἱοῦ αὐτοῦ (R5:10)、すなわち、διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ と読み換えるとよいであろう。すると、もう一つの現実とは、キリストの〈まこと〉、キリストの十字架によって、恵みが支配する現実であり、（人間がそれに気づくか否かは別にして）義と生命の世界であるという

ことになる。すでにわれわれが見てきたガラテヤ書2章20b節や『キリスト者の自由』十二章では、一人の個人についていわれたことが、ここでは人間全員について、しかも信不信を問わず、信不信以前に、いわれているのである。人間の認識以前に、根源の〈こと〉は生じた、〈まこと〉は真事となった、そして人間はすべてこの〈こと〉の中に組み込まれている、というのである。この世界、この国を、われわれは、パウロがキリストの十字架を「キリストの〈からだ〉」(R7:4, cf.Col1:22)と呼んだ掣みに倣って、「〈からだ〉言語空間」と呼ぶことにしよう。先に「キリストの現実」と名づけたものが、この〈からだ〉言語空間である。ここに「〈からだ〉」とはキリストの〈からだ〉をいうが、われわれの〈からだ〉も、「〈からだ〉は不品行（のため）にはなく、主に属し、主は〈からだ〉に属する」(1C6:13)とか「あなたがたの〈からだ〉はキリスト〈からだ〉の一部である」(1C6:15)とあるように、このキリストの〈からだ〉に含まれる。もともと、「わたしが今肉体にあつて生きるとは、わたしを愛しわたしのために自らを棄てた神の子の〈まこと〉の中に生きることである」というガラテヤ書2章20b節の意味も、「わたしの〈からだ〉は神の子の〈からだ〉に抱かれている」という意味だったのである。これをわれわれは「人基一体」と呼んだのだ。そして、わざわざキリストの〈からだ〉を「言語空間」と呼ぶのも、実はその空間に、キリストの肢体であるわれわれの〈からだ〉を通じて「十字架の言葉」が、キリストの生命の言葉が響いているからである。「わたしたちはいつもイエスの死をこの〈からだ〉に負っている。それは、イエスの生命が、わたしたちの〈からだ〉において示される (ἐν τῷ σώματι ἡμῶν φανερωθῆ) ためである。わたしたちは、生きている限り、絶えずイエスのゆえに死に渡されている (=キリストの十字架に渡されている)。それは、イエスの生命が、わたしたちの死ぬべき肉体において示される (φανερωθῆ ἐν τῇ θνητῇ σαρκὶ ἡμῶν) ためである」(2C4:10f)とある通りである。パウロによれば、われわれは神の言葉を、〈こころ〉にではなく、



〈からだ〉に聞け、なぜなら、神の言葉は、〈こころ〉がではなく、〈からだ〉が語っているから、ということになろう。〈からだ〉言語空間とは、要するに〈からだ〉のことであるが、ここにいう〈からだ〉とは単なる物体をいうのではなく、言葉を語る〈からだ〉をいうのである。これは、現代の科学的（〈こころ〉言語的）身体観とは大きく異なるので、注意を要する。

以上、本段落においてパウロは、アダムの「現実」とキリストの現実という二つのリアリティを、ὡς～οὕτωςあるいはὡσπερ～οὕτωςという接続詞句で対置並立させた。それはあたかも二つの相反するリアリティが同じ土俵上で均衡したsymmetryの関係にあるかのようである。そして人間はこの二つの国の一方から他方へ、たとえば罪の王国から恵みの王国へ、信仰の決断によって移住できるかの如くである。しかしそれではまるで二つの実在（穢土と浄土）をとともに認める浄土教主流派の二種深信論<sup>(7)</sup>をパウロもまた認めているかの如くである。しかしながら、もともと二つの相反する支配体制が同時に並存できるものかどうか？むしろどちらかが本当の現実なら、他はそうではなくなるのではないのか？どちらかがreal realityだとすれば、他は（虚偽とまではいわないにしても）いわばvirtual realityになってしまうのではないのか？そして、もし罪と死のリアリティがわれわれを圧倒するというなら（これはわれわれの素朴な実感によく訴えてくることではある）、恵みは所詮はフィクションにすぎなくなるのではないのか？

そういう疑問が湧いてこよう。しかし、この問題に入る前に、われわれはもうしばらくパウロのいうところを聞くことにしよう。

2) アダムの「現実」に律法が加わって罪の自覚と可視化（イスラエルの歴史と宗教）が生ずるが、キリストの現実はその超過する

5:13 ἄχρι γὰρ νόμου ἁμαρτία ἦν ἐν κόσμῳ, ἁμαρτία δὲ οὐκ ἐλλογέται μὴ ὄντος νόμου,

5:14 ἀλλὰ ἐβασίλευσεν ὁ θάνατος ἀπὸ Ἀδάμ

μέχρι Μωϋσέως καὶ ἐπὶ τοὺς μὴ ἁμαρτήσαντας ἐπὶ τῷ ὁμοίωματι τῆς παραβάσεως Ἀδάμ ὅς ἐστιν τύπος τοῦ μέλλοντος.

5:20a νόμος δὲ παρεισηλθεν, ἵνα πλεονάσῃ τὸ παράπτωμα·

5:20b οὐ δὲ ἐπλεόνασεν ἡ ἁμαρτία, ὑπερπερίσσευσεν ἡ χάρις.

5:13 罪は律法以前にも世にあったが、律法がなければ、罪は罪として認められないのである。

5:14 しかし、アダムからモーセまで、アダムの違反と同じような罪を犯さなかった者にも、死の支配は免れなかった。このアダムは、きたるべき者の型である。

5:20a しかし、律法がはいり込んできたことによって、罪過（の自覚・可視化）は増し加わった。

5:20b だが、罪（の自覚・可視化）が増し加わったところに、恵みはそれを超えて満ち溢れた。

13節と14節でパウロは、アダム以来人間は罪と死の下にあったが、イスラエルではモーセ以後律法が与えられて、罪の自覚と可視化が生じた。それがイスラエルの宗教と歴史であるという。これをわれわれの言葉で言い直そう。「言語機構分析」が教えるように、今日われわれは〈こころ〉言語の巨大な体系の下に生きている。現代の文化文明はことごとく〈こころ〉言語という形態を取っている。もちろんそこでは神の存在する余地はなく、われわれは神を見ることができない。しかもその言語空間の中に生きている人間は、それが大きな問題であるとも感じないのが普通である。物理学者が物理学を研究したために罪の意識に苦しむということはなからう。（もし彼にそういうことがあったとすれば、それは彼が物理学言語とは別の言語を聞いたからである）。この点では彼はアダムからモーセまでの人々と同じである。しかし〈こころ〉言語の中でも宗教、すなわち、宗教的〈こころ〉言語に触れると、別の事態が生ずる。罪の自覚である。これが宗教言語が他の〈こころ〉言語とは違った特異な点で、それはもともとこの言語が、人間の〈こころ〉とは違うところから語られる言語・〈か

らだ) 言語・神の言葉(後述)に由来しているところから来る(R7:12, 14)。しかしこの神の言葉も、今は人間の言語、〈こころ〉言語の一つに取り込まれてしまった(R7:11, 13)。だからこそ「律法によっては罪の自覚が生じるのみ」(R3:20)といわれるのである。

実は20a節もそれをいっている。ここにいう παράπτωμα も、そして次の b 節にある ἀμαρτία も、「罪の自覚」あるいは「自覚化された罪」をいうと見なければなるまい(v.13b)。しかしそうだとすると20b節(οὐ δὲ ἐπλεόνασεν ἡ ἀμαρτία ὑπερπερίσσευσεν ἡ χάρις)は「罪の自覚が深ければ深いほど、恵みも豊かになる」という意味になるであろうか。つまり、恵みは罪の自覚の従属変数で、後者の強さに従って比例するということになるであろうか。ここが crucial point である。もしこの、日本のキリスト教会でも広く流布している恵み理解が正しいとすると、これは二種深信論の論理的帰結である「悪人正機」<sup>(8)</sup>をパウロも認めていることになる。二種深信論は結局アダムの「現実」のみを唯一の実在と認めることになる教説だが、その出口のない唯一の実在たる罪の世界にあって、罪に泣くこと自体を是とするのが悪人正機である。そこには暗闇(夜)に射し込む一条の光への渴望はあるが、光そのもの(昼)はない。夜の闇の世界であって、昼の光の世界ではない。しかし悪人正機は、この闇の世界の中であって是とされるために、あくまでそこにとどまろうとする危険を孕んだ教説である。浄土教内部でも批判がないわけではないこの教説に、キリスト教会が無反省のまま同調あるいは共鳴するとしたら、それはアンティ・クリストの誘いにのることになろう。(もとより、筆者のこのような「悪人正機」理解が誤解であるなら幸いである。喜んで訂正したい)。

しかしながら幸いなことに、20b節のテキストからも、また前後のコンテキストからも、そういうことがここでいわれているのではない。ここでは恵みについて、ἐπέρισσευσεν という動詞ではなく、ὑπερπερίσσευσεν という動詞が使われていること

に注意しておこう。この接頭辞 ὑπερ- は英語の接頭辞 hyper- の基になった「過多」「過剰」「超過」を示すギリシア語で、ober- とか über- と訳される。したがってこの動詞は「(罪の度合いを) 超えて満ち溢れる・超過する」という意味であって、英訳では increase **much more**、独訳では **überreich werden** などと訳される。「正比例する」という意味ではない。ルターという verschlingen (呑み込む) あるいはもっと強く ersaufen (=ersäufen) (溺死させる) というのがパウロの真意に近い(cf.1C15:20~28)。さらにコンテキスト上からは、何よりも本節に後続してくるローマ書6章冒頭にそれは明々白々である。「では、わたしたちは、なんと言おうか。恵みが増し加わるために、罪にとどまるべきであろうか。断じてそうではない(メー・ゲノイト!)(R6:1f)。ここでは罪が独立変数で恵みが従属変数、アダムの「現実」こそが aseitas (自存性)を持つ真の現実だとする見方が漸固拒否されているのである。これはわれわれの配列順序では次に来る段落によっても裏づけられる。

3) アダムの「現実」を包摂し、その闇を照破する(「呑み込み、溺死させる」—ルター) 光としてのキリストの現実こそが、本来の人間の現実である

5:15 Ἄλλ' οὐχ ὡς τὸ παράπτωμα, οὕτως καὶ τὸ χάρισμα· εἰ γὰρ τῷ τοῦ ἑνὸς παραπτώματι οἱ πολλοὶ ἀπέθανον, πολλῶ μᾶλλον ἡ χάρις τοῦ θεοῦ καὶ ἡ δωρεὰ ἐν χάριτι τῇ τοῦ ἑνὸς ἀνθρώπου Ἰησοῦ Χριστοῦ εἰς τοὺς πολλοὺς ἐπέρισσευσεν.

5:16 καὶ οὐχ ὡς δι' ἑνὸς ἀμαρτησάντος τὸ δόρημα· τὸ μὲν γὰρ κρίμα ἐξ ἑνὸς εἰς κατάκριμα, τὸ δὲ χάρισμα ἐκ πολλῶν παραπτωμάτων εἰς δικαίωμα.

5:17 εἰ γὰρ τῷ τοῦ ἑνὸς παραπτώματι ὁ θάνατος ἐβασίλευσεν διὰ τοῦ ἑνός, πολλῶ μᾶλλον οἱ τὴν περισσεΐαν τῆς χάριτος καὶ τῆς δωρεᾶς τῆς δικαιοσύνης λαμβάνοντες ἐν ζωῇ βασιλεύουσιν διὰ τοῦ ἑνός Ἰησοῦ Χριστοῦ.

5:15 しかし、恵みの賜物が罪過に比例するとい

うことはない。なぜなら、ひとりの罪過のために多くの人が死んだとしても、神の恵みと、ひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物は、さらに豊かに多くの人々に満ちたからである。

5:16 かつ、この賜物は、ひとりの犯した罪の結果（＝死の支配）とは異なっている。すなわち、さばきは、ひとり（の罪過）から、（多くの人を）死に定めるが、恵みの賜物は、多くの人々が罪を犯したことから、（多くの人を）義とする結果へと至らせるのである。

5:17 もし、ひとりの罪過によって、そのひとりをおして死が支配したとすれば、ひとりのイエス・キリストを通し、（生命はさらに力強く支配しているはずであるから）、あふれるばかりの恵みと義の賜物を受け容れる者たちは、さらに力強く生命にあって支配する（＝満ちる）であろう。

この三節とも 20b 節の言い換えであることは明らかであろう。20b 節の接頭辞 ὑπερ- は、15 節と 17 節では πολλῶ μᾶλλον (much more) に替わっているが、意味は同じである。「それを超えてさらに豊かに・さらに力強く」などと訳せよう。動詞を欠いている 16 節は、〈こころ〉言語空間—それは宗教言語を含めて、神の見えない夜の闇の空間である—を外から照らし、その闇を破する（ルター的にいえば「呑み込み溺死させる」）ことによって義へと転ずるキリストの〈まこと〉、キリストの〈からだ〉 (τὸ δὲ χάρισμα ἐκ πολλῶν παραπτωμάτων εἰς δικαίωμα)、言い換えれば、〈こころ〉言語空間を包摂し照破する光としての〈からだ〉言語空間、「〈まこと〉の御〈からだ〉」の不思議さ・有り難さ (Ave Verum Corpus!—Mozart) を述べているのである。そしてこれこそ、すなわち、キリストの〈まこと〉、キリストの〈からだ〉、〈からだ〉言語空間こそ、われわれ人間の本当の現実であるというのが、ローマ書 5 章のテーマだったのである。われわれがいま・ここに生きているとは、実にこのような〈まこと〉の現実の中に生きているということだったのである (G2:20b)。

そうだとすると、われわれがこの真の現実を本当に「受け容れる者」(οἱ λαμβάνοντες) (v.17) になるかどうか、この「〈まこと〉の御〈からだ〉」を本当にいただくかどうか、われわれがキリストの〈からだ〉に抱かれていること、われわれが人基一体の人間であることに本当に頷くかどうか、この〈まこと〉(真言)を本当に聞くかどうか、ということが、問題になろう。17 節 (19 節も) 後半の本文は未来形で書かれているが、それは時間におけるわれわれ人間全員の課題だということであろう。「神の和解を受けなさい！」(2C5:20)。

#### 4 εἰς πίστιν —コリント前後書から

しかし、われわれが、われわれの真の現実、キリストの〈まこと〉を本当に聞こうとするとき、具体的にいったいどこに耳を向けたらよいのか。われわれの〈こころ〉にか。あるいは、キリスト教会がよくいうように「聖書」にか。だが先にも少し述べたように、パウロではそれははっきりしている。キリストあるいは聖霊 (1C15:45) は、差しあたりは（注がれない限りは）われわれの〈こころ〉にあるのではなく (cf R5:5)、キリストの〈からだ〉の一部たるわれわれ人間の〈からだ〉にあり、人間の〈からだ〉を宮としている (1C6:13, 19) というのである。したがって、キリストの〈まこと〉(真言)とは、われわれの〈からだ〉において、また〈からだ〉から、われわれの〈こころ〉へ、語られる言葉、〈からだ〉言語であるということになろう。

2C4:10 πάντοτε τὴν μέκρωσιν τοῦ Ἰησοῦ ἐν τῷ σώματι περιφέροντες, ἵνα καὶ ἡ ζωὴ τοῦ Ἰησοῦ ἐν τῷ σώματι ἡμῶν φανερωθῇ.

4:11 ἀεὶ γὰρ ἡμεῖς οἱ ζῶντες εἰς θάνατον παραδιδόμεθα διὰ Ἰησοῦν, ἵνα καὶ ἡ ζωὴ τοῦ Ἰησοῦ φανερωθῇ ἐν τῇ θνητῇ σαρκὶ ἡμῶν.

2C4:10 わたしたちはいつもイエスの死をこの〈からだ〉に負っている。それはイエスの生命が、わたしたちの〈からだ〉において啓示されるため

ある。

4:11 わたしたちは、生きている限り、絶えずイエスのゆえに死に渡されている (=キリストの十字架に渡されている)。それはイエスの生命が、わたしたちの死ぬべき肉体において啓示されるためである。

〈からだ〉とは「死ぬべき肉体」(v.11b)であり、死に裏打ちされた生であり (v.10a, 11a)、有限性であり、生死の二元性である。いまそれが語る、というより、「いつも」(πάντοτε)「絶えず」(ἀεί)それは語っている。それが〈からだ〉言語である。何を語っているというのか。それは第一に、死の問いかけである。それは「いつも」「絶えず」、**汝はキリストと同じ死する身なり**と語る。われわれは、われわれ〈ところ〉人間は、この問を聞くが、この間に答えるすべを知らず、ただたじろぐのみである。いったい〈ところ〉言語のうちのどれが、この間に答え得よう。〈ところ〉言語は死ぬことを考えない、考えることができない。それはただこの問を忘れることができるだけである。宗教言語とて同じである。それはいわゆる「死後の生」(それはわれわれの生前の生をもう一度あの世に投影し延長したものにすぎない)を案出することによって死を密かに消去し、現実の死と向かい合うことから逃走する。それ故、真の生も知らない。〈からだ〉言語の死の問いかけに、宗教言語は向き合うことも答えることもできない。したがってそれは、ただ「〈まこと〉のノモス」(=〈からだ〉言語)によって排拒せしめられ (R3:27)、終焉せしめられる (R10:4) ほかはなく、「呑み込まれ、溺死せしめられる」ほかはない。そして、〈からだ〉言語のこの問いかけは、「いつも」であり、「絶えず」である。それは時間上のすべての点において響いている。誰がそれを聞かないか。それは審判であり十字架である。それが上に掲げた10節前半と11節前半の意味である。

だが、この〈からだ〉言語の問は同時に答でもある。根本的な問というものは常にその答をも含み且つそれを示す、**汝はキリストと同じ生きる身**

**なり**と。審判は恩寵であり、十字架は復活である。それが両節後半の意味であり、〈からだ〉言語の語る第二の、そして本来の意味である。〈からだ〉言語はわれわれに死を語ることによって生を語る、われわれを殺すことによって活かす。しかし誰がこれを本当に聞くか。「〈ところ〉人間 (ψυχικός άνθρωπος) は、神の霊の〈こと〉(τὰ τοῦ πνεύματος τοῦ θεοῦ)を受け容れない。それは彼には愚かなものだからである。また、それは霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(1C2:14)とある通りである。われわれアダムの末裔は、〈ところ〉人間である限り、この〈まこと〉を受け容れない、否、受け容れることができない、というのである。

しかし、これに続く節でパウロは、この〈ところ〉人間に「霊の人」を対置せしめ、霊の人、「キリストのヌース」を持つ人 (=〈まこと〉人間)にはそれができる、しかも自分たちこそはそれだ、と言いつ切る。

1C2:15 ὁ δὲ πνευματικός ἀνακρίνει [τὰ] πάντα, αὐτὸς δὲ ὑπ' οὐδενὸς ἀνακρίνεται.

2:16 τίς γὰρ ἔγνω νοῦν κυρίου, ὃς συμβιβάσει αὐτόν; ἡμεῖς δὲ νοῦν Χριστοῦ ἔχομεν.

1C2:15 しかし、**霊の人は、すべてのことを判断する**。が、自分自身はだれからも判断されることはない。

2:16 「だれが主のヌース (=霊)を知って、彼を教えることができようか」。しかし、このわたしたちこそは、キリストのヌースを持っている。

このような霊の人、キリストのヌース (覚)を持つ人、すなわち、神の〈まこと〉を受け容れ理解する人間、神の〈まこと〉の自覚者—われわれの用語を使って言い直すと「〈まこと〉人間」(οἱ πιστεύοντες) (R3:22) —とは、実は、**死んで甦った〈ところ〉人間 (不覚者)以外ではない** (1C15:44a)。死は復活 (死の死) に先立つ。不覚は自覚に先立つ。そして、アダムは反転したキリストの影像として、キリストを予め示す。影は闇ではない。

それはあくまで光の影として aseitas は有しないが、光が当たっていることは示す。アダムはキリストの予型である (R5:14)。それが人間的時間的な順序である。第一コリント書 15 章にはその詳細な描写がある。(和訳のみを掲げる)。

1C15:42 死人の復活も、また同様である。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに甦り、

15:43 卑しいもので蒔かれ、栄光あるものに甦り、弱いもので蒔かれ、強いものに甦り、

15:44 「〈こころ〉の〈からだ〉」(σῶμα ψυχικόν) が蒔かれ、「霊の〈からだ〉」(σῶμα πνευματικόν) が甦る。「〈こころ〉の〈からだ〉」があるのなら、「霊の〈からだ〉」もある。

15:45 聖書に「最初の人アダムは生ける〈こころ〉(ψυχή ζῶσα) となった」と書いてあるとおりである。しかし最後のアダム (=キリスト) は命を与える霊 (πνεῦμα ζωοποιούν) となった。

15:46 しかし、最初にあったのは、霊の〈からだ〉(τὸ πνευματικόν) ではなく〈こころ〉の〈からだ〉(τὸ ψυχικόν) であって、その後霊の〈からだ〉が来るのである。

15:47 第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る。

15:48 この土に属する人に、土に属している人々は等しく、この天に属する人に、天に属している人々は等しい。

15:49 すなわち、わたしたちは、土に属している形をとったように、また天に属している形をとるであろう。

ローマ書 5 章後半では人間がそこに存在している場・現実 (=キリストの〈からだ〉) の構造とその運動が語られていたが、ここではこの現実の中に生きる人間 (人間の〈からだ〉) に焦点が合わされている。キリストの〈まこと〉という現実の中であって、人間は「〈こころ〉の〈からだ〉」・「〈わたし〉の〈からだ〉」から、「霊の〈からだ〉」・「キリストの〈からだ〉」・「〈まこと〉の〈からだ〉」へと転換する。つまり、人間 (=〈からだ〉) の主体

が、〈こころ〉から霊へ、〈わたし〉からキリスト・〈まこと〉へと替わる。人間という〈からだ〉は同一であるが、その主体は転換する。この主体転換が、「朽ちるもの」「卑しいもの」「弱いもの」と呼ばれている〈こころ〉(主体者としての〈こころ〉) の死であり、死の死であり、したがって死者の甦りである。〈からだ〉の死後、〈こころ〉が何らかの体 (幽霊体?) を纏って天国に往生するなどという話ではない。しかし、これは同時に、〈まこと〉の自覚である。より正しくいうなら、〈まこと〉、即ち、キリストが、わたしの〈からだ〉において、自己自身を現し、そしていまや、わたしの〈こころ〉において、自己自身を覚知するのである。これをパウロは ἐκ πίστεως εἰς πίστιν (R1:17, cf.R3:22) といった。神の〈まこと〉から人間の〈まこと〉へ、神の内なるキリストからわたしの内なるキリストへ、という意味である。

そして、われわれはそれを既に、ガラテヤ書 2 章 20 節前半「最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」(ζῶ δὲ οὐκέτι ἐγώ, ζῆ δὲ ἐν ἐμοὶ Χριστός) に見てきた。ルターがそれを “Ich lebe aber; doch nu nicht ich, sondern Christus lebet in mir.” (G2:20a) と訳し、それに続けて後半を denn という接続詞で始めて “Denn was ich jtz lebe im Fleisch, das lebe ich in dem Glauben des Sons Gottes, der mich geliebet hat vnd sich selbs fur mich dargegeben.” (G2:20b) (Reclam 文庫版) (傍線筆者) としたのは、まったく正しかったというほかない。なぜなら、わたしの信仰・わたしの〈まこと〉・わたしの内なるキリスト (Christus in me) (v.20a) の根拠こそは、「わたしは自らの現実の生を、わたしを愛しわたしのためにご自身を捨てた神の子の〈まこと〉の中に、生きている」(ego in Christo) (v.20b) という根源的な事実だったからである。(もとよりわれわれはその際、ルターの真意はどうであれ、このルターのドイツ語 des Sons Gottes を主語的属格に取っている)。まさに ἐκ πίστεως εἰς πίστιν である。<sup>9)</sup>

## 5 結 語

われわれは先のローマ書5章でも、まさに同じことを論じてきた。その後半(12節以下)の主題は、われわれ人間の置かれているある根源的な事態、われわれ人間が組み込まれているある根源的な〈こと〉であって、それがキリストの〈まこと〉であり、キリストの〈からだ〉であり、(われわれの用語では)人基一体であった。そして「それ故に」(Διὰ τούτου) (R5:12), その中に生きているわれわれ人間において(ということとは「時間において」ということであるが)、〈まこと〉・人基一体は自覚され(R5:1~2, 6~11), さらに具体的にはこの人基一体の自覚において「十字架即復活」・「審判即恩寵」が認識されたのである(R5:3~5)。これが5章前半の要旨であった。われわれは、最後に、このパウロ神学の例証として、第二コリント書12章をここに読み返して結びとしたい。

この12章で「1) わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主の幻と啓示(ὀπτασίαι καὶ ἀποκαλύψεις κυρίου)について話そう」とパウロは語り始める。コリントの神秘的熱狂家たちが誇る「啓示」(複数形)を念頭に置いてか、彼はここに自己の昇天体験を、「2) わたしはキリストにある(ἐν Χριστῷ) ひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた—彼が、〈からだ〉を持ったままであったか、わたしは知らない。〈からだ〉を離れてであったか、それも知らない。神がご存じである。3) この人が—彼が、〈からだ〉を持ったままであったか、〈からだ〉を離れてであったか、わたしは知らない。神がご存じである—4) パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている」という言い方で、あたかも他人事のように語り始める。パウロにしてみれば、この種の「啓示」をコリントの霊感家たちが誇るというなら、彼もまたそれができないわけではないというのであろう。事実、〈ところ〉人間(2節及び3節)、とりわけ宗教的

人間にとっては、神を見る(あるいは聞く)という体験は、垂涎的であろう。それ故、このような宗教的体験を得た者たちは、当然そのような素質を欠いた一般の人々に対して高慢になるであろう。多分コリントにはそのような「最高度の」宗教的な〈ところ〉人間が居たのであろう。もっともそのような〈ところ〉人間でも決してキリストの〈まこと〉・人基一体から離れることはない。彼らもまたキリストの中にある。だからパウロは「キリストにあるひとりの人」(ego in Christo) という。

しかし、彼は、彼らのように、それによって霊的ヒュブリスに陥ることはなかった。なぜなら「7a) (このような)啓示の異常さ故にわたしが高慢になることのないように(καὶ τῇ ὑπερβολῇ τῶν ἀποκαλύψεων ἵνα μὴ ὑπεραίρωμαι), わたしの肉体に一つのとげ(σκόλοψ τῇ σαρκί)が与えられた」からである。「7b) それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。8) このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるようにと、三度も主に祈った。9a) ところが、主が言われた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに成就される』(καὶ εἶρηκέν μοι ἄρκει σοι ἡ χάρις μου, ἡ γὰρ δύναμις ἐν ἀσθενείᾳ τελείται)。9b) それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇らう(ἡδιστα οὖν μᾶλλον καυχῆσομαι ἐν ταῖς ἀσθενείαις μου, ἵνα ἐπισκηνώσῃ ἐπ' ἐμὲ ἡ δύναμις τοῦ Χριστοῦ)。10) だから、わたしは、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとを、キリストの(力がわたしに宿る)ために、喜んで受け容れよう(εὐδοκῶ)。わたしは弱い時にこそ、わたしは強いのである(ὅταν γὰρ ἀσθενῶ, τότε δυνατός εἰμι)」。ここに「わたしの肉体のとげ」とは、何らかの病気ないし障害という(単なる神秘体験などとはまったく別次元の)、まさに彼の〈からだ〉の苦悩の現実をいい、それは同時に「〈わたし〉を打つサタンの使」、すなわち、審判であるというのである。彼はこの審判から逃れようとする。しかし彼が聞いた主の言葉とは何だったか。それこそ、「審判が恩寵である」という言葉であった

(v.9a)。ここに主の言葉 (καὶ εἶρηκέν μοι) とは、苦悩の現実から発せられる〈からだ〉の声、〈からだ〉言語以外の何であろう。この、〈からだ〉が語るといふこと、〈からだ〉言語の啓示こそは、あの種の「啓示」とは根本的に異なる真の啓示であることは明らかであろう。そしてこの神の義の啓示を受け容れること、この「審判即恩寵」の言葉を認めること（「喜んで自分の弱さを誇る」「喜んで受け容れる」）が、実は「キリストの力がわたしに宿る」こと、Christus in me にほかならないといふのである (v.9b～10)。この人基一体の自覚において、逆に十字架即復活は受容されるのである。

ともあれ、この例もまた、「ego in Christo から Christus in me へ」、「第一のピステイスから第二のピステイスへ」(ἐκ πίστεως εἰς πίστιν)、人基一体という根源の〈こと〉からその自覚へ、の展開であるといえよう。

## 註

- (1) 本論文は、ルーテル学院大学で筆者が行っているパウロ書簡の講読の基本的な考え方を述べたものである。普通「パウロ神学」といわれているものの主題(ザッへ)は、神でも人間でもなく、「神即人」のイエス・キリストであるというのが、聖書の非専門家たる筆者の、ごく平凡な理解であって、この「即」としてのイエス・キリストを何とか探究したいというのが、筆者の考える「神人学」である。ただし今回は、ルターの『キリスト者の自由』から大きなインパクトを受けて書いた。もっともここに見られるようなルターの扱い方には、ルター学者から異論が出るかもしれないが、筆者にとっては、個々の(大小の)西洋神学者の神学そのものにはさしたる関心はなく、むしろその教説がどれだけ聖書の指し示すザッへの解明に有用かどうか、すべてなのである。そのような意図の下に、ここではルターの教説を、パウロ理解のために「使わせていただいた」ことを付記しておく。
- (2) このように訳すと、キリスト教はたちまち観念的な主観性の宗教(〈こころ〉言語・〈わたし〉言語の宗教)の一つに墮してしまうであろう。なぜなら、それは「わたしは、わたしがキリストを信じ、わたしがキリストに決断することによって、義とされる」といふことになり、結局、「わたしがわたしを救う」という構図になってしまうからである。いや、わたしが信じる(決断する)のではない、神の働きによってそうするのだと強弁してみても、それも結局、自分の思い込みにすぎないのではないかという内心の疑惑が人を常に苛むことになろう。また、このような「キリスト信仰(決断)」の一つ手前に「罪の認識」をおいても同じである。二種深信(後掲注7参照)の行き着く先は悪人正機であり、パウロはこれを拒む(R6:1f他)。そのような宗教は、まさに裏返しの律法主義、肉により無力になった律法そのものである。
- (3) プルトマンによれば、ここにいう「栄光」とは「終末論的救い」をいう。即ち、das eschatologische Heil der Zukunft, das ja manchmal als δόξα bezeichnet wird (vglzB 2Kor4.17) und hier δόξα τοῦ θεοῦ (Gen.auctoris oder qualitatis) genannt wird (Bultmann, *Adam und Christus nach Röm.5 in: Exegetica* (Mohr Tübingen) S.426).そしてdas eschatologische Heilとは義のことであり、義とは生命のことであり (S.424) から、それは復活といつてもよい。その「希望」、しかも実現が確実なその希望は、われわれには既に与えられてここにある、「栄光」はまだ来ていないが、「希望」はすでに来ている、という。つまり、希望は事実上すでに来ている栄光である。
- (4) Barth, *Christus und Adam nach Röm.5* (EVZ-Verlag 1964) S.118参照。なお、前掲プルトマン論文はこの書に対抗して書かれたもので、両書ともに示唆に富む。
- (5) 周知の如く、西洋神学史上ではここはいわゆる「原罪(遺伝罪)論」が出て来た典拠の一つとされるが、本稿はもちろん別の視点からパウロ原典を読んでおり、そのような神学論義には関わらない。
- (6) 井上忠東大名譽教授が提唱されている、諸々の言語文化体系の哲学的分析批判で、その重要なカテゴリーの一つが、本論文でもパウロの律法概念を解明するために採用した「〈こころ〉言語」(「〈わたし〉言語」ともいう)である。その大略の意味は本文に示した通りであるが、井上教授によると、〈こころ〉言語は自閉空間を形成し(これを「蘭化」という)、その中に居る人間には現実の声が聞こえなくなるという(これはパウロも知っていた! — cf.R3:19)。詳しくは教授の『超—言語の探究』(1992)、『究極の探究』(1998)(ともに法蔵館)等の著作を参照されたい。
- (7) 二種深信論の大衆化をはかった蓮如の多くの言葉の中から一つだけ参考のために例を引いておく。「それ当流の安心のすがたはいかんぞなれば、まづわが身は十悪・五逆、五障・三従のいたづらも

のなりとふかくおもひつめて、そのうへにおもふべきやうは、かかるあさましき機 (=人間) を本と (=第一に) たすけたまへる弥陀如来の不思議の本願力なりとふかく信じたてまつりて、すこしも疑心なければ、かならず弥陀は攝取したまふべし。このころこそ、すなはち他力真実の信心をえたるすがたとはいふべきなり。」(御文章 二帖15)

- (8) なお、マルコ福音書2章17節(罪人の招き)などでいわれている「罪人」とは、ユダヤ教の律法、特に食物規定を守らない人たち、つまり敬虔なユダヤ人(義人)から見て、非ユダヤ教的・非宗教的な人間をいっているのであって(イエスもパリサイ派の律法学者のいう意味で「罪人」という概念を使っている)、『歎異抄』などでいう「悪人」とはまったく違う意味である。イエスはここで、自分はユダヤ教支配体制下における優者(義人)の側に立つのではなく、劣者(罪人)の味方だといっているのである。事実、福音書では多く「取税人」

と並べてこの語が使われているように、宗教的概念というよりむしろ社会階層的身分的な意味が強い。

「取税人や遊女」「異邦人なる罪人」という言い方にも注意。なお、「罪人」(ἀμαρτωλός)という言葉は、四福音書の中ではルカ福音書を除けば使用頻度は意外に少なく、パウロもわずか5回である(形容詞として使用されているR7:13を除く)。その中2回はローマ書5章に出ており、コンテキストから見れば、「罪人なるが故に救われる」(悪人正機)というのではなく、「罪人にもかかわらず救われている」というのが、パウロの主張である。

(9) われわれは先にルター『キリスト者の自由』十二章のGlaubeを第一のピスティスに対応させたが、次の十三章に出てくるGlaube des Herzensは、この第二のピスティスに対応させることができよう。ルターにあっても「神のGlaube から人間のGlaubeへ」であったと考えなければならぬ。多分、逆(人間の信仰が第一)ではあるまい。

## Pistis of Jesus Christ

OGAWA, Osamu

This thesis attempts to understand the letters of St. Paul from an anthropological viewpoint. It makes the meaning of ἐκ πίστεως εἰς πίστιν clear mainly based on Roman Chapter 5. This INTERPRETATION, which receives great influence from Martin Luther, may be quite different from more commonly held views in today's theological world.

**Key Words:** from pistis to pistis